

<研修を終えて>

グリーンデンタル夫馬 夫馬吉啓

以前より、スウェーデンはメンテナンスの受診率などで日本と比較され、予防歯科の先進国という認識がありました。国を挙げての取り組みが出来ている理想の国としての評判がある一方、実際のところはどうなのかと懐疑的な気持ちもあり、自分の目で確かめてみたいと思って今回の研修旅行に参加させていただきました。

到着前は、この国ではどんなメンテナンスをしているのか、どんな材料を使っているのか、また医療制度はどんな仕組みなのか、というありきたりな関心しかありませんでしたが、到着直後の立食会で加藤先生に読んでいただいた熊谷先生のお手紙の中で、“歯科医師としての哲学を学びなさい。” というメッセージにより自分の視野が広がった気がしました。ダン・エリクソン教授からの歯科医師としての心構えに触れた言葉も、より心に響くものがあり、自分が思っていた以上にこの研修が意義のあるものになりました。

マルメ大学での講義は、歯を削らずに残すためにはどうしたらいいか、介入を遅らせるにはどうしたらいいかなど、修復して残すことを基本に考える日本の講義の内容とは根本的に視点が異なることが期待通りでした。そのような視点のカリオロジーのスペシャリストの先生方の講義を直に聴くことで、歯科医師として歯を自然のまま残すことへの使命感が強くなりました。そして、講座の枠を超えたマルメ大学の PBL 方式の学習方法は、“臨床に即した考える力”を養うことができ、その中での疑問から調査をすることで、臨床に直結した研究が増えるという好循環への可能性に大変興味が湧きました。総合的に考える力を養うことが、これからの歯科医療に必須だと思いました。

そして、国を挙げてのリスクコントロールが実際に運用されているマルメの公立歯科診療所を見学させてもらい、実際現場で働いている人の声も聞けてとても参考になりました。リスクコントロールをシステム化し料金形態も工夫することで、患者に予防への意識を芽生えさせ、結果的に口腔の健康を獲得させることを、特定の人だけでなく万人に同じく提供することができる可能性がこのシステムにあると思います。すでに超高齢社会に突入している日本はスウェーデン以上に高齢者が多く、社会保障費の増大による国の財政圧迫が懸念されています。口腔の健康と全身疾患との関連性は数多くの報告があり、日本の社会保障費削減のためにも、全ての歯科医院でリスクコントロールの考えが広まっていかなくてはならないと思いました。

ダンエリクソン教授が講義の中でおっしゃっていましたが、“我々歯科医師は患者の歯を治すのではなく患者の脳を治さなければならない”すなわち口腔の正しい健康観を根付かせることを理念とし、日々の診療に勤しんでいこうと思います。このような素晴らしい研修旅行に参加させていただき誠にありがとうございました。企画していただいた熊谷先生をはじめとする SAT の皆様やマルメ大学の先生方、他関係者の皆様に、この場を借りて深く感謝申し上げます。